

高岡市における伝統産業の現状と変容

——高岡銅器の産業構造と技法の行方——

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
氏名：三木瑠

目次

第1章 問題関心.....	1
第2章 先行研究.....	2
第1節「伝統」の変容.....	2
第2節 高岡の伝統産業.....	3
第3節 本稿のねらい.....	4
第3章 調査.....	5
第1節調査対象.....	5
第1項高岡市という産地.....	5
第2項高岡伝統産業青年会.....	5
第2節調査概要.....	7
第4章 高岡伝統産業における産業構造の変化.....	8
第1節 産地内の関係性の変化.....	8
第1項モメンタムファクトリー・Oriiの変化.....	8
第2項 高岡銅器業界における現状.....	9
第2節 産業従事者の変化.....	10
第2項 異業種からの参入.....	12
第3節 この章のまとめ.....	14
第5章 高岡における技法の変容.....	15
第1節伝統的技法と現在の状況.....	15
第2節 新しい技法と扱い.....	16
第3節 この章のまとめ.....	18
第6章 産地の変化を促す仕掛け.....	19
第1節「ツギノテ」とは.....	19
第2節「ツギノテ」の意義.....	20
第3節 「ツギノテ」が課題意識を高める可能性.....	21
第7章 結論.....	22
注.....	24
参考文献・URL.....	25

第1章 問題関心

需要低下による経済的な問題や後継者不足、職人の高齢化などで産業規模の縮小及び伝統的な技術や職人の継承が途絶えるという課題を日本の伝統産業は抱えている。また伝統産業は本来保護され維持されるのではなく、道具や高度な技術を用いた商品で人々の需要を満たし観賞用としてや日常生活に役に立つものとして用いられることで続いてきた産業であった。しかし生活スタイルの変化や海外の安価さとの競合でそれまでの前提は崩れ、需要の低迷や新たな産業形態への対応ができなければ職人や事業所の経営は困難になり、経営が困難な場所にはたとえ若者が参入したくてもできない状態となっている。

そうした状況のもと、近年では工場見学やワークショップが各地で開催され、消費者だけでなく工芸の職人と異業種の企業やデザイナーなどといった異なる分野間のつながり創出が行われ、産業や産地自体を活性化するべくモノづくり関係人口の増加が図られている。

またこれまでの伝統的な技術や産業構造からの移行により新たな商品や販路を開拓し現在の市場に合わせた変化を続ける企業も見られる。

そこで本調査では古くから鋳物産業の一大産地であり、1986年からは日本最大級のクラフトコンペを開催しているなど工芸の街としての認識が根づいている富山県高岡市を対象とし、中でも若手従事者を中心とした組織として産地を先導し、近年交流イベントなど多様な活動を実施している高岡伝統産業青年会や、これまで伝統的な工芸品に関わり高岡市企業の中でも早くから独自の技術や商品販売に伝統から舵を切ったモメンタムファクトリー・Oriiに着目し、高岡の伝統産業の現状や課題はどんな様相を呈し、その解決に向けた取り組みはいかに展開されているのか。その具体的な内容を追いながら、現在において「伝統産業⁽¹⁾」や「伝統工芸品⁽²⁾」、「伝統」そのものがどんな形で存在し、認識されているのかを明らかにすることを本稿の目的とする。

第2章 先行研究

前述した本稿の目的を達成する基盤として、高岡の伝統産業に関する研究と「伝統産業」の変容に関する研究の2方向から先行研究を検討する。

第1節「伝統」の変容

「伝統」の変容に関する研究は、産業の形態という点からの視点と、伝統技術の変容という視点、そして「伝統」そのものの捉え方という視点がみられる。

金(2018)は京都・西陣織の事例から、伝統産業の現在について「外発的要因」と「継承と断絶」という点で説明している。まず「外発的要因」では、伝統産業の低迷により従来の織屋－織手という関係性が柔軟化し、職人が生産工程に主体的に介入するなど新たな挑戦をする余地が生まれたとし、産業形態の変化がこれまでの伝統的な構造に変容を生んだと捉えられる。また「継承と断絶」では、これまで「伝統」の一部として受容されてきた工賃の安さや販路の不透明さ、織屋との間の垂直的関係性などといった産業の前近代性を、新しく参入した若手職人らは克服すべき課題として認識している。他方で織物の魅力や技術の高さは守るべき「伝統」として語られており、西陣や和装産業とは無関係の背景を持つ「よそ者」である若手職人らであるが故の「伝統」の再解釈がみられる。

そうした彼らの「伝統」のもと行われる新たな取り組みは、新たな生産体制や販路の開拓に積極的で西陣織を実用的価値のある良質な日用品と位置づけ、和装産業にとどまらず幅広い産業への取り組みに注目している「企業家型」、技術伝承を伝統工芸(西陣織)の危機とし、その保存を目的としておりそのため従来の産業内秩序に順応的でありながら新たな発信や作品制作といった開放性・柔軟性を併せ持つ「技術伝承型」、西陣織を現代的なセンスを加えた个性的でおしゃれな雑貨と位置づけ、産業の縮小や未来に対する危機感から既存の下請け職人という形のみでオリジナル製品を用いた取り組みを行う「クリエイター型」の3類型に分けられている。

また、伝統技術の変容に関して、川口(2010)は金沢箔における縁付(えんつき)金箔と断切(たちきり)金箔を事例に挙げ、伝統的な背景や歴史の長さを持つ縁付金箔ではなく、洋箔から生まれそれ自体の歴史は浅いが技術としての奥深さを持ち、その工程の少なさや生産性の高さといった長所も持つ、「伝統」と近代的合理性の間のいわばグレーゾーンにあ

る断切金箔に移行している状況を説明している。加えて、金沢箔業界においては「製造業者＝職人」、「販売業者＝問屋」ということになり、職人も問屋も同じひとつの組合に所属している。総じて金沢箔の場合は問屋主導型産地と言えるが、その長所としては産地全体として顧客志向でスピーディに対応することが可能であり、各部門間の連携も問屋主導によってスムーズなものとなる点が挙げられる。一方短所としては、技術者（職人）の自立心が薄くなり、職人が問屋に意見しづらいなど技術革新を起こしにくくなる点が挙げられる。一方で断切金箔職人である S さんは 2 つの問屋からの仕事を行っている。よって他の職人とは異なり、問屋、組合に対して意見を言いやすい立場にある。

第 2 節 高岡の伝統産業

今回着目する高岡の伝統産業に関する研究は、近年どこの地域でも叫ばれている従事者の減少や産地の高齢化、需要低迷による産業の縮小といった困難な状況は高岡でも違わず見られるとしながらも、その苦境の中から生まれた状況を利用・展開した新たな取り組みについて注目している。

まず舩田・真野(2015)は、従事者を取り巻く環境が悪化する中で若手の産業従事者らが本業の経済的活動に加えて対外的交流に基づく地域まちづくりの担い手としての役割を果たすように変化しているとしている。特に高岡伝統産業青年会という従事者組織では、他地域への展示開催や工場見学など組織としての活動が対外的になり、産業・産地の発展や交流人口の増加させる役割を担う可能性を挙げている。

また菅谷(2012)は、高岡市の伝統産業が抱える課題として①従来の問屋から職人・メーカーに仕事を出すという関係性は商品が売れなくなったことで崩れ、その後の明確な解決がなされていない問屋に関わる課題、②職人がいざ市場に出ていこうとしても、商品開発はもちろん問屋がこれまで担っていた配送等の細部に対応できず十分な活動ができない作り手に関わる課題の二つを指摘している。そして、問屋に関しては問屋同士が協力関係を取ることによって従来の問屋と職人・メーカーとの関係を強固なものにする取り組みを紹介し、作り手に関しては、従来の問屋と職人・メーカーの関係とは異なる形で商品開発を行うことで自立性や主体性を持つように作り手の意識を変化させる取り組みを紹介している。

第3節 本稿のねらい

まず、舩田 真野(2015)や金(2018)では、伝統産業が低迷する現状において、産地内の若手従事者やその組織、また他分野から新たに参入する従事者が従来の産地に新たな視点や取り組みをもたらしている動きがみられた。また、菅谷(2012)では、従来の問屋と職人やメーカーの間にあった関係性の変化、それによる職人とメーカーのいわば作り手が主導する商品開発やビジネスが示された。これらの先行研究を踏まえ、第4章では、産业内での新規または若手の従事者や問屋と職人の関係性などを含んだ産業構造の変化が、現在の産地においてどのように垣間見えるのかに焦点を当てる。

加えて、金(2018)や川口(2010)でみられる、伝統に対する考え方の変化や伝統技術の変化は高岡市の産地においても同様だろうか。続く第5章では、伝統産業の産地である高岡市の現在において、伝統的技法はどのように変化しその変化はどのように捉えられているのかに焦点を当て分析・考察する。

そして第6章では、こうした流れの中で産業における産業構造と技法の展開を触発する試みが行われていることを論じる。

第3章 調査

第1節 調査対象

第1項 高岡市という産地

高岡市の伝統産業は1611年加賀藩2代藩主前田利長が高岡へ入城し、その際城下町繁栄における産業政策の一環として現在の高岡市金屋町に7人の鋳物師を招き工場を建てたことから始まり、銅器/漆器産業が中心であった。特にこの2大産業は高岡銅器・高岡漆器として1975年に国の伝統的工芸品に指定されている。

高岡の伝統産業での大きな特徴は「分業制」である。例えば銅器を作るうえでは原型、彫金、研磨、着色、仕上げ、梱包などそれぞれの作業を分担する工場があり各工程に専門の技術が存在しており、一つのモノづくりに多くの人が関わり合う文化がある。

戦前は高岡銅器として、鍋釜や火鉢といった生活必需品や輪灯やおりんといった仏具の製造が行われた。その後社会の変化に伴い生産する商品が変化していく中、高度経済成長期には記念品や贈答品需要や美術銅器の需要が高まった。現在では仏具の生産はあるものの安定しているとは言えず、旧来の製品や生産形態から移行した生産体制が必要となっている。

第2項 高岡伝統産業青年会

高岡伝統産業青年会は銅器/漆器両業界の40歳以下の従事者(職人及び問屋)が所属する組織であり、高岡商工会議所の青年部から独立する形で1974年に発足、現在は第48代会長を迎え今年で52年目を迎える。発足当初は200名ほどいたとされる会員は2025年現在27人まで縮小しており、会員の中には高岡銅器業界に勤める人が13人、漆器業界が1人おり、その他に木材屋や建築家、個人の作家、デザイナーや広報を専門とする方も含まれ、他業種を受け入れた構成となっている。また特定地域における複数の伝統工芸品にかかわる青年会組織は高岡伝統産業青年会と石川県伝統産業青年会議の二つである。

同青年会は伝統産業従事者の減少、事業継承問題、需要の低迷など様々な要因が重なり大きな危機を抱えている業界の現状でも先人たちの想いや技術を受け継ぎ新たなジャンルに果敢に挑戦して伝統産業の振興を目指すことや、技術の精度を深めること、

会員や産業内の交流を促すこと、高岡伝統工芸及び高岡伝統産業の認知度を上げ長く継続していくことを大きな目的としている。こうした目的に付随して近年ではもともと自分たちの技術や作品を市内で展示する企画を県外で行う外に向けた取り組み。加えて、実際に工場に来てもらって工場見学ツアーを通じた交流イベントや自分たち職人の技術と外部から募ったデザイナーとをマッチングし商品開発を行う企画、同じ業界内や地域内での互いの工場や仕事の説明会等といった内側での取り組みを中心に行っている。

具体的な取り組み例として、「ツギノテ」(2023年11/3~11/4、2024年10/19~10/20、2025年10/18~10/19)が挙げられる。2022年の試験的な開催を経て、2023年から本格的に開催している。2023年は高岡伝統産業青年会、2024、2025年は新たに組織されたツギノテ実行委員会が主催となり、作家や職人、消費者とのつながりや新たな商品製作のきっかけを創出する機会を作るイベントである。二日間限りの工業団地を高岡市の立体駐車場内に形成し、そこで全国のクラフト作家や富山の職人による出店やワークショップ、フード等を展開している。具体的には「産業技術展示エリア」「クラフト&ワークショップエリア」「フードエリア」の三つに分かれており、2025年は全体で106個のブースが開かれた。また「産業技術展示エリア」では開催地は高岡であるものの、高岡の伝統工芸や技術を展示販売するだけでなく、他地域からの出店や伝統に縛られない様々な技術・作品を見ることができる。

また「高岡クラフツーリズム」(2022年9/25、2023年9/16、2024年8/3)は、15年ほど前から高岡伝統産業青年会が主催する、現役若手職人のガイド付きで市内に点在するオープンファクトリー(人気工場)をめぐるイベントである。参加者が興味のあるコースを選択し見学・職人体験が可能となっている。2024年は小学5、6年生を対象とした「高岡KIDSクラフツーリズム」に形を変え開催された。

第2節調査概要

本調査では先述した昨年度モメンタムファクトリー・Orii の役員であり昨年度高岡伝統産業青年会会長でもある櫻野祐一さん、そしてデザイナーとして高岡の伝統産業に参入し以前まで高岡伝統産業青年会に所属していた羽田純さんにインタビューを実施した。概要は以下のとおりである。

櫻野祐一さん

もともと建築系の大学を出て同じく建築系の会社に入社。現在勤める有限会社モメンタムファクトリー・Orii の代表であった折井氏と知り合い、地元に戻るタイミングで13年前に同会社に入社。現在は取締役総括マネージャー。入社後の1、2年後に高岡伝統産業青年会に所属し、昨年度は会長を務めている。モメンタムファクトリー・Orii は1950年に「折井着色所」として高岡市に創業して以来、美術工芸品や仏具といった銅製品の着色を手掛けている。現在は工芸品に加え、建材や表札、雑貨等も扱う。高岡銅器における「銅着色」とは単なる塗装ではなく、薬品や炎をコントロールし金属に色彩を発色させる伝統技術である。

インタビューは1回目2024年6月27日、2回目2025年7月16日に実施した。

羽田純さん

産業や美術工芸の短大を出たのちギャラリー運営を行う。展示を行う上で企画やチラシ案内を作成する過程からデザイナーの道へ進み、現在はデザイン会社である株式会社ROLEの代表取締役を務めている。高岡伝統産業青年会には、ギャラリーで高岡のモノづくりや職人の展示を行った際に当時の会員から勧誘を受けデザイナーとして加入し会長も務められ現在は年齢により退会済みである。また現在「ツギノテ」の実行委員長としてツギノテを主導しています。

インタビューは2024年7月24日に実施した。

第4章 高岡伝統産業における産業構造の変化

第1節 産地内の関係性の変化

第1項モメンタムファクトリー・Oriiの変化

高岡市の伝統産業は前述のとおり分業制により鋳物や着色といった様々な個別の事業所や工場が存在しており、各分野や工場ごとに産業の衰退といった課題に対する状況は異なっている。例えば鋳物屋はその初期投資の大きさから新規参入は見込めない状況の中、既存の鋳物屋に入る仏像等の従来の仕事は減少している。その中で現代アーティストやご当地キャラクターのブロンズ像製作といった仕事に手を広げる動きもみられるが継続した仕事や発展が見込めるとは言えず苦しい状況を強いられる。また実際に着色の現場で働く櫻野さんからは次のように語られた。

着色屋もそうですが、昔は売れる商品の作業をひたすらしていました。時代の流れでその商品が売れなくなってしまい、その技術を使うシーンがなくなって、仕事も減っていった。技術はあるけど商品が売れなくなり、それを発揮する場がなくなってしまった。弊社の場合は新しい色を開発して、色を商品にすることができましたが、当時のビジネスモデルだけでは、継続できなくなっている。各社の特色を活かした技術、商品をつくって、継続・発展していける事業所が残っていくのかなと思います。

従来通りの販売や仕事が衰退する状況の中で、産業内で経営を継続していくには既存の技術に特色を持たせたり新たな変化をつけたりして付加価値を持たせるような動きが必要となる。こうした伝統的な着色から新しい色へと転換することにより仕事にも変化が生じたと櫻野さんは語る。

従来で言ったら問屋さんがいて、鋳物さんがいて、着色さんいて、そんな流れで、仕事をもらっていた立場なんです。それが自分たちの色を商品にすることができて、自分たちの色で、この製品を着色してほしいという依頼が増え、問屋さんからも依頼をいただくことになったり。また、僕たちもこの色で商品展開ができるようになって、鋳物さんに仕事を依頼することも増えております。もしかしたら、これは一昔前か

らしたら、頻繁にあったことではないと想像しております。

モメンタムファクトリー・Orii では 10 数年前から従来の下請け仕事のような形式から脱却したいという思いもあり、自社独自の色を Orii の 12 色としてパッケージ化し売り出すことで逆に仕事を依頼するといった新しい経営の形も築いている。

第 2 項 高岡銅器業界における現状

こうした産業内での新たな動きが出ている高岡銅器業界において、その関係性に変化は生じているのか。これについては分業制と抱えている危機感に着目して語られた。まず分業制という通常 1 つのメーカーでは商品が製作できない体制により、他の自社で完結した量産製作を行う地域と比べ横のつながりや仲の良さが構築されている。加えて、分業するにあたり連帯して危機感を持った中で普段の仕事や伝統産業青年会での発信等に取り組んでいる。一方で分業を担う各会社が従来とは違った自社でのそれぞれの事業や企画にも積極的に取り組める環境も作られている。

銅器業界の中でも、メーカーが新たな販路開拓を積極的に行うことに対して、容認される流れが、ここ 10 年ほどで定着しはじめてるように思う。

他の産地では構造的に難しい側面もあると予想もしますが、高岡銅器業界には、誰もが自由に挑戦できるという共通認識が存在し始めているように思う。

もしかしたら、今後そういういった展開をしていかないと、産地としての維持そのものが困難になってしまうかもしれません。

また基本的に既存の事業の維持や拡大にはまずは仕事が必要であるため、各々の長所や従来の製作等を活かした発信を各会社行っている現状である。具体的な取り組みとしては高岡市の神仏具卸売り会社である「ハシモト清」が仏壇で使われる花瓶や香炉、燭台などの仏具に、水抜き用の穴を開け、植物を植えるポットに変えて販売する等の取り組みや高岡市内の大手金属リサイクル業者とモメンタムファクトリー・Orii の、集まる金属パーツや真鍮を集めた再生金属をコースターや表札等に変え付加価値を付けて販売することで市内での再生金属の循環させる取り組みが聞かれた。

第2節 産業従事者の変化

伝統産業という職人の高齢化や産業の衰退、それに伴う後継者不足は常々課題として挙げられている。ただそうした課題や問題点が叫ばれるようになって久しくなった現在において、課題の移り変わりや対策等に関し各会社や伝統産業に従事されている方、高岡伝統産業青年会がどういった動きを見せているのか本項では櫻野さんのインタビュー内の言及から分析する。

第1項 高岡伝統産業青年会の変容

まず、課題について尋ねると櫻野さんから以下のような思いが聞かれた。

実際、ほんとに担い手不足や、人手が足りないとか、賃金が安いとか、将来性に不安に感じるとか、そこはおそらく一般的にあると思います。ただ実際、それに向けてどう動こうとか、その課題意識が薄いというか、深掘して行動に移せてないのが課題かもしれない。

この課題意識の薄さとは何だろうか。櫻野さんは次のように語る。

一昔前は経営者あるいはその2世3世というか次に経営者になるよみたいな人が多い団体だったんですけど、今はもう従業員の割合が多くて。立場の違いから、どうしても経営層とは見えている景色や課題への入り口が違うのもあって、従業員だけでは解決が難しかったり、どこか他人事になってしまったりする部分があるかもしれません。実際、みんなの中に「なんとなく不安だ」はあっても、それをしっかり言葉にして共有する場がまだ足りていないと感じます。どうしても目先の「困った」で止まってしまい、10年後を見据えた動きにまで繋がっていないのが今の課題です。

ここでは産業内や伝統産業青年会内での構成員が直接経営に関わりのあった経営者や後継者が多かった状況から、いち従業員の従事者が増えたことにより一時的な不安を抱くことや漠然とした問題意識を抱くことはあっても、長期的な発展や改善を見据えた課題意識を持つことや、そうした問題の本質や背景について考える機会そのものが減少している現状が示された。

また、その背景にある会内における従業員の増加に関して、以下のように言及されている。

従業員さんだとやっぱり活動に制限があったり、フレキシブルに今、このタイミングで動けるっていうのがやっぱり限られるメンバーが多いんで、そういったのでは不自由なシーンもあるのが課題ではあるんです。

このように伝統産業青年会内での活動としてはいち従業員としてでは活動そのものにも制限がかかり、以前ほどの自由度や活発な動きが減少している課題も見られる。

一方ここで「課題意識の薄さ」として語られた、漠然とした問題意識はあるがその問題について明確に対処できていないという課題はこれまで伝統産業が抱えてきた伝統の維持や保存を念頭に置いた課題とは違い、伝統の有無にかかわらず個々の会社や高岡という産地そのものを活気づかせるうえでの現状の課題として語られた。またこの課題には個人が抱いた課題を共有する機会や実行力が不足しているという状況を含んでいると考えられ、そうした課題解決の場が必要になる。この場については第6章で言及する。

第2項 異業種からの参入

他方で高岡伝統産業青年会内では他業種の会員が加入するといつ形で構成員の変化が起こっており、従来の伝統産業への従事の有無にこだわらない人々の加入がこれまでの職人中心の業界にはなかった考えやノウハウなどを持ち込み、会の活動促進や産地の盛り上げに一役買っている。

一昔前はやっぱり伝統産業に従事しないと会に入れないうみみたいな空気があったんですけど、羽田さんとか、デザイナーとして伝統産業青年会の活動をデザインしていきたい。と熱い思いをもった先輩方が、複数加わっています。その流れが、気づけば十何年前にあったのがきっかけにもなって。それ以降、他業種の方も入って伝産の活動に共感して、一緒に盛り上げてくれる方ならぜひ喜んでお迎えしたい。

ここで名前が出た羽田さんについて、羽田さんは当時職人しか会員内に居なかった伝統産業青年会にデザイナーとして参入した人物であり、職人中心の業界にはなかった考えやノウハウなどを持ち込んでいる。本稿では、その具体的内容を組織への参入経緯や伝統産業との関わりの過程についての言及から触れる。

羽田さんは、前職のギャラリー運営でモノづくり系の展覧会を行っていた際に、実際の職人さんから外からではなくもっと内側に入ってリアリティのある展示をした方がいいといった意見をもらい、その当時高岡伝統産業青年会の会員だった方から勧誘を受け青年会へ入会する。当時羽田さん以外の会員全員が職人という中デザイナーとして参入し、デザイナーとして伝統産業や職人さんたちに貢献したいという思いから活動し始める。まず当時の職人さんたちの様子に目を付け、現在も用いられている「ガラは悪いが、腕はよい。」というキャッチコピーを作成する。もともとはキャッチコピーを作ろうという目的ではなく、これまで問屋さんに隠されて名前も出ていなかった職人さんたちを前に出したという思いのもと活動しその後会員の職人それぞれの名刺作成に着手する。しかし当初職人たちの賛成は得られず、「職人はここ(腕)が名刺だから持たない」と断られてしまう。これからは産業構造が変化し自分たちの名前でモノを売る時代が来ると考えていた羽田さんは、過去の環境に根付いた職人らに危機感を抱き、理論だけでなくより親密な関係

を築き最終的に作成を依頼されるまでに至る。名刺作成後も青年会においてデザイナーとしてプロデュースを行い、前述した「ツギノテ」を実施するなど青年会内で活動を続け、今年度からは青年会を退会して新たに立ち上げられた「ツギノテ実行委員会」の委員長として高岡の伝統産業に携わる。

特に名刺作成の経緯では、従来の問屋と職人の関係の外から感じた「職人を前に出す」という思いのもとに進められ、その考えに影響を受け最終的には職人側から依頼されるまでに至っている。この点は他業種の参入による構成員の変化が青年会や産業内に影響を与えた例と言える。

現在の高岡伝統産業青年会には全体の27人うち約半数がデザイナーや広報、異業種の経営者など高岡銅器業界外の会員が半数を占めている。以前の職人や工場の経営者などが多くを占めていた状態からは大きく縮小したように見えるが、高岡銅器業界だけで完結するのではなく、異なる業界の視点や考えがこれまでにない発想や関係性を産み出す可能性を感じられる。

第3節 この章のまとめ

まず第1節にあるモメンタムファクトリー・Oriiの変化からうかがえるのは、従来産地で当然に行われていた問屋主導型の形態から脱却する動きが進行していることである。ただしそうした動きによって従来の問屋との関係性が全く無くなるのというのではなく、仕事や依頼などを通じた双方の関係性が変化していると言える。

次に第2節の高岡伝統産業青年会の様子からは、単に担い手不足ということだけでなく、産地の従事者として仕事や将来について不安を抱えるだけで、その言語化や共有を促す動きが少ないという課題がみられる。これには会内の構成員の変化に関係があると示された。その一方で、地域の伝統産業とはつながりのない異業種から参入した人がこれまでの業界になかった考えを持ち込み、働きかけることが職人を触発して産业内の変化を促す面も見受けられる。

第5章 高岡における技法の変容

モメンタムファクトリー・Oriiにおいて、ビジネスの形態が変わる中で工芸に欠かせない技法はどういった形で存在しているのかを見ていく。

第1節 伝統的技法と現在の状況

まず高岡銅器の着色における伝統技法について説明する。そもそも着色とは鋳物といった金属の保存性や美化を目的とし、金属が持つ本来の色を引き出すため薬品を用いて金属の表面を腐食させ独特の発色を生み出す。この詳しい工程には様々種類があり、ここではモメンタムファクトリー・Oriiの伝統技法を例に挙げる。まず金属に糠みそを塗り、バーナーで焼くことで模様を出す。次に硫酸銅と炭酸銅の混合液の入った鍋で煮込み「煮色」と呼ばれる色を発色させる。そして最後に稲の芯を束ねた箒で磨く「鉄漿(おはぐる)」を施す。こうした一連の行程は着色の伝統的な技法のひとつである。

こうした伝統技法に直接着手する機会や仕事は、モメンタムファクトリー・Oriiでは十数年前の時点ですでに業務全体の2割程度となっていたが、ここ数年でさらに1割以下まで減少している。また、その内容としてはコースター製作といった着色体験が主であり、製作の仕事としてはほとんどなくなっている。それでも素晴らしい伝統的技法としてそれを知ってもらおう活動を継続している。

第2節 新しい技法と扱い

現在仏具等の銅製品に加えて、建材や表札、服飾等にもビジネスの幅を広げるモメンタムファクトリー・Oriiでは、その過程においてそれまでの伝統的技法を変化させ独自の着色技法を使用している。

今の僕たちの着色は、いわゆる昔からある伝統的な技法での色付け、そのままだけではないんです。伝統的な技術をベースにしながら、折井がより工夫を加え、応用してできた着色技法で展開を広げていった結果が今の形です。伝統工芸、伝統産業ってところだけをビジネスとして、会社が成長したわけでは無いんです。ただ、今も伝統的な技法での着色も行っており、その独自の新しい着色技法のベースにはもちろん伝統的着色技法があるっていうところなんです。

この新しい着色技法だが、従来の伝統的な着色技法とは使う材料と発色する色に大きな違いがある。材料に関して、伝統的な銅着色は数種類の金属や成分が混ざった厚い鋳物に対し行っていたが、現在の技法では比較的薄い金属板を一時的に高温に熱することにより発色させている。鋳物屋やその工場の減少に合わせて自社でも調達できる板を用いて自社で完結した製作へと移り変わっていると言える。また発色する色に関して、従来は複数の金属の混ざった鋳物が持つ特有の色を出すやり方だったが、今は自社独自の色として開発したものを打ち出し複雑さや色の幅の増したものになっている。

また現在用いている着色技術が伝統技術と言えるか尋ねると先述した通りで伝統的な技法を応用してはいるものの、道具やその方法に至るまで伝統的な技法とは異なるということであった。しかし現在、伝統的な着色技法は組合等の指針によって定義されているが、それを踏まえて次のように語る。

折井から聞いたことがあるのですが、自分が考えたこの着色技法が、これから先、長く人に伝わって行って、いつか『伝統的な着色技法』になれば、作り手としてそれはほんと大変嬉しいことだと申しておりました。このまま受け継がれて、あとの時代の人たちに、伝統と認められる日がもし来るならば、私たちにとってもこの上なく光栄なことだと思います。

このような思いがある一方で、モメンタムファクトリー・Orii ではこの技術の特許を取らず、現状 Orii 独自の色という形をとるにとどまる。その背景には、特許のような登録がなされる際には技法や細かなデータを開示しなければいけないが、発色する色が似ていても多少の成分に差があれば侵害にならないなど、色を厳密に指定して制限することの難しさがある。

また以前よりも伝統工芸品やその技術に直接着手する機会や仕事が減少したことから、伝統や伝統工芸に対する意識といった面でも従業員の変化がみられる。

私たちは伝統産業に従事する事業所ではございますが、業務内容としては、正直、伝統工芸品の制作だけに特化してはおりません。ですから、伝統工芸、産業を守るという使命感を、毎日強く抱いているか。たとえば、語弊もあるかもしれませんが、私自身もスタッフも、伝統工芸品という敷居の高いものを作っているというよりは、自分たちが培ってきた技術を用いて、今求められる商品を作ることに専念している感覚の方が強いように思います。

ただ、伝統技法を使う場面は以前より少なくなっていますが、その貴重な技術を絶やすことなく、事業所としても継続させ、さらにその伝統技法でしか出せない、新しい付加価値を乗せた商品を作っていくことが、今後の私たちのミッションだと思っています。

ここでは製品そのものが伝統工芸品ではないので「伝統工芸品」を作っているという意識や守ろうとする使命感は必ずしも持たれていないことが示されている。一方で、今後の展望として伝統技法の継続と新たな活用の方を探ることも考えている。

第3節 この章のまとめ

伝統的な技法から新たな技法へと変化させる技術革新は、今後ビジネスの拡大や時代の流れへ適応するために、ますます進行していくと思われる。モメンタムファクトリー・Orii は、伝統的技法を根底に置きつつも、材料や色などの自由度を上げた新しい技法やそれにより生まれる色を用いて、ビジネスの拡大を図ってきた。

他方で、今ある伝統技術について、富山県との伝統技法における職人の作業や感覚を可能な限り言語化してAI化することで、現在の職人のサポートに加え、将来誰かが昔の技法を使いたいと思った際に使えるようなプロジェクトにも協力している。

使われなくなってしまうたら、その技法はもう伝統とは呼べないのではないか。そんなふうにも感じることがあります。誰かが「伝統だから良いものだ」と、残す努力をしてくれたからこそ、今の評価があると考えたりもします。もちろん、それが素晴らしい技法であり、美しい仕上がりの色であることは十分に理解しています。ただ、良いものであっても時代の流れで使われなくなる現実があることを学びました。

しかし、富山県とのプロジェクトで一つの伝統的な着色技法をAI・DX化した際、折井が語っていたことが心に残っています。たとえ今その技法が使われなくなったとしても、いつか未来の職人がその技術に興味を持ち、挑戦して壁にぶつかったとき、このシステムが「どの工程が違っていたかのヒントをくれる。

もし一度途絶えてしまっても、ずっと先の時代に『この技法を再現したい』という人が現れたとき、役立つシーンがあれば嬉しい

こうした言葉を聞いて、こうした形で伝統的な着色技法を残す作業もまた、今の私たちに必要なことなのだと強く実感しました。

モメンタムファクトリー・Orii の場合、伝統的な技法を用いた仕事がほとんどなくなっている中で働き手の伝統への意識も低下し、会社としても新たな技法に仕事のほぼすべてが移行している。その一方で従来の後継者を募るような形とは違った失われる技術を残す取り組みを行っていたり、伝統的な着色技法の体験会を継続して行っていたりと、ビジネスと伝統とを両立した対応が行われている。

第6章 産地の変化を促す仕掛け

第1節「ツギノテ」とは

第3章第1節第2項で紹介したクラフトフェア「ツギノテ」は、それまでに高岡伝統産業青年会が行っていたイベントを1か所に集約させたある種集大成のような企画であり、参加者が多くの企業や技術を一度に見て回れる点に魅力を持ったものとなっている。例年100個ほどのブースが開かれ、その内約半数が「産業技術展示エリア」で展開され各々の技術や作品の展示販売や説明が行われている。

「産業技術展示エリア」だが、この名称は2024年開催以降から使われており、2023年開催時は「高岡産業・工芸博覧会エリア」とされていた。この時から他のエリアには他地域のクラフト作家等も参加していたが、特に2025年は51ブース中9ブースが新潟県燕三条の工場や大阪、群馬などの県外企業の出店となっており、地域を超えた交流がクラフトフェア全体を通して盛んになっている。またブースに出展する企業も幅広く、高岡市内の彫金や着色等を担う製造業の会社はもちろん、繊維業を営む企業や材木関連の企業、自動車関連企業なども参加しており、地域だけでなく業種を越えた交流の場となっている。

各ブースの内容としては、並んでいる製作物には従来の生產品や卸していた商品と、全ブースではないが新たに自社で開発や政策を行った製作物があり、基本的にすべての商品が購入可能な形で展示されている。例えば「モメンタムファクトリー・Orii」のブースでは、自社で作成している着色技法を用いた雑貨等の商品販売や「ツギノテ」に向けて作成した限定品の販売を行い、訪れた参加者には販売員がその色や技法の説明を口頭で行っている。また高岡市の問屋である「ハシモト清」は従来卸売りを行う仏具等に加え、従来の商品である香炉を自社で多肉植物の鉢として再利用した商品や雑貨を販売・紹介を行っている。

第2節「ツギノテ」の意義

出展者は「ツギノテ」に出展する中で、多くの事業所や企業との関係性構築を図ることができ、新しい技術や発想に触れることができる。新しい仕事になるような偶然のつながりが創出されたり、各社が抱える不安や展望といった情報の交換が行いやすかったりと、1か所に数十社のブースが集まることで生まれる利点は大きいと考えられる。

また「ツギノテ」は従来の固定化した取引では気づき得なかった相手方の持つ技術を知る機会にもなっている。「展示会」という形式をとっていることで日常的な取引とは違う、新技術や新企画を目にすることができるという。また、既知の業者が新しい挑戦をしている姿を目の当たりにすることで、普段の取引とは違う刺激を受け、より自社の開発等に対する意欲の向上にもつながるといふ利点もある。

加えて、各社が自分たちでブースを構える「展示会」のような形式が上手く作用している。これまで技術を売ってきた下請けの会社がブースを構えたり他の出展者と交流したりするために、会社案内をつくる機会を創出しているのもその一つの例である。またモメントムファクトリー・Orii は「ツギノテ」を単なる物販の場ではなく「商品・活動・技術」を紹介する場として捉え、技法の実演や来場者層に合わせた商品の選定・開発を行っていた。

こうした「ツギノテ」ならではの形式が通常の販売や取引とは異なる魅力や新しい取り組みを引き出していると考えられる。

第3節 「ツギノテ」が課題意識を高める可能性

自社の技術や作品を展示する上でどういった説明や見せ方が効果的なのか。自分たちの会社のどの部分を伝えたいのかといったことに関して考える機会を与える点や、不安や課題を言語化し会社単位や出展者間で共有できるような機会となる点からツギノテが産業内における課題解決の場として挙げられる。特に「ツギノテ」は立体駐車場という一か所に消費者はもちろん、会社や職人、作家までもが集まり、その距離の近さゆえに偶発的な会話し得る環境にある。そこでは、互いの事業の状況に関して交流が起こり前述した課題解決の一助になり得ると考えられる。

また「ツギノテ」は当日のフェア以外でも「ツギノテ塾」と呼ばれる産地の職人同士が個々人で抱えている課題や問題意識、今後の可能性等について異業種や行政の人たちも含め意見交換をする勉強会も一部に含まれている。これらの「ツギノテ」がもつ意義は、「ツギノテ」を通して生まれる出会いの機会や発表の機会等によってだれかだけでなく産地そのものを活性化しようとする機会の創出にあると考えられる。

第7章 結論

金(2018)や、菅谷(2012)では従来の問屋と職人・メーカーの垂直的關係は従来の商品が売れなくなったことで崩れ、柔軟化しているとされた。実際にモメンタムファクトリー・Oriiを通して見えたのは、自ら新しい技術を用いて問屋主導型の關係から離脱しようとする動きであった。それにより従来の垂直的關係性から、自社から仕事を依頼するような、対等かもしくは逆転した關係性を構築している。

また、他の会社や着色以外の業種については詳細を把握できてはいないが、各会社・メーカーが自社で完結した商品開発を行うといった、従来の問屋と職人・メーカーというものとは違った形で活動することがここ10年ほどで当たり前に行われている現状がある。この点は菅谷(2012)で紹介している、作り手に自立性や主体性を持たせる取り組みをしていた10数年前からそうした取り組みや意識が産業に馴染んだ結果のように感じられる。

また金(2018)では、「よそ者」である伝統産業とは無關係の背景を持つ産地の従事者が、当たり前で伝統として受容されてきたものを捉えなおし課題として認識する様子があった。これまで問屋で隠れていた職人たちに焦点を当て、名刺作成に着手することでこれまでの持つのは技術だけという業界の当たり前を崩そうとした取り組みは、まさに「よそ者」として伝統を捉え直す動きであった。加えて、そうした伝統の再解釈や再編が進む中でも、元の伝統技法や作品についての情報だけはデータベース化して後世に残そうとする動きも始まっており、ただ変わるだけではない伝統に対する対応が見て取れる。

川口(2010)で見られた、工程の少なさや生産性の高さといった視点から技法を移りかえる合理的な変化は、高岡銅器の特にモメンタムファクトリー・Oriiでも同じように確認できた。産業の縮小に合わせて、自社で完結した製作ができるような技法への転換や、他分野への技術の利用がそれに該当する。

ここまで会社同士の關係性の変化や従事者の変化に関して触れてきた。その中から、これまで先行研究でたびたび取り上げられた需要低下による経済的な問題や後継者不足、職人の高齢化などといった産地が抱える課題に加えて、漠然とした問題意識抱くことはあっても、産地の従事者として仕事や将来について不安を抱えるだけで、その言語化や共有をする動きが少ないという課題を確認した。

そしてこうした課題解決の場の一つとしてここ数年で始まったクラフトフェア「ツギノテ」が挙げられた。同じく舛田 真野(2015)で紹介された活動である対外的な展示会の「かほり展」や高岡市内の工場見学を職人が案内する「クラフツーリズム」といった取り組みの機能を1か所に集約した新しい取り組みである。多くの会社が集まる密度の高い空間はつながりを生む機会となり、各社がブースを構える形式は各々が自社について主体的に考える機会となっている。また、これまでの展示会や工場見学といった一過性のイベントとは異なり、「ツギノテ」に向けた商品開発をはじめ、ツギノテ塾のような意見交換の場も設けられるなど通年での取り組みとして位置しており、より産地の発展に密着したものとなっている。

注

(1) 経済産業省による、伝統産業とは工芸品の生産・流通に関わる産業を指す。一方土井氏によると伝統産業とは機械生産の方法に頼らずに、道具と高度技術によって高品質商品を生産する産業であり、伝統産業は保護されて維持されてきたのではなく、伝統的技法によって日常生活の需要を充たす高品質商品を作り続けてきたものとされる。(土井乙平 2006)

(2) 経済産業省によると伝統工芸品は

「主として日常生活の用に供されるもの」「その製造過程の主要部分が手工業的」「伝統的な技術又は技法により製造されるもの」「伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるもの」「一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事しているもの」という5つの項目をすべて満たし、伝統工芸品産業の振興に関する法律(昭和49年法律第57号、「伝産法」)に基づく経済産業大臣の指定を受けた工芸品のことを指す。

一方釜堀氏によると、伝統工芸品は長年にわたって培ってきた世界に誇る技術により生み出されたもの。経済産業省の指定する伝統工芸品及び都道府県が指定するものとされる。

(釜堀文孝, 2021)

参考文献・URL

文献

- ・釜堀文孝, 2021, 「伝統工芸の活性化戦略についての考察(1)」『九州産業大学伝統未来研究センター』第4号 19-30
- ・川口恵美, 2010, 「「金箔箔の現状とこれから」―断切職人を中心―」, 富山大学人文学部人文学科平成22年度卒業論文
- ・金善美, 2018, 「伝統産業の現代的変容」『フォーラム現代社会学』17号 108-121
- ・菅谷桃恵, 2012, 「伝統産業の産地活性化―高岡銅器を事例に―」, 富山大学人文学部人文学科平成24年度卒業論文
- ・土井乙平, 2006, 「伝統産業における高度技能等の伝達と継承 - - 伝統と日本的家族」』87巻 105-109
- ・舩田晃 真野洋介, 2015, 「伝統的工芸品産地における若手従事者及び従事者組織の地域まちづくりに対する役割 - 富山県高岡市を対象として -」『都市計画論文集』50巻3号、953-960

参考資料 URL

- ・経済産業省 「伝統的工芸品に関する法律について」
(https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/nichiyo-densan/densan/designation.html 2024年8月15日取得)
- ・経済産業省製造産業局伝統工芸品産業室, 2022, 「経済産業省説明資料」
93743201_06.pdf (bunka.go.jp)
- ・経済産業省製造産業局伝統工芸品産業室, 2008, 「伝統的工芸品産業をめぐる現状と今後の振興施策について」 g80825a07j.pdf (ndl.go.jp)
- ・高岡銅器協同組合「高岡銅器について」
(<http://www.doukikumiai.com/skill/chakushoku.html> 2025年11月17日取得)
- ・モメンタムファクトリー・Orii「Oriiの伝統技術について」
(<https://www.mf-orii.co.jp/about/> 2025年11月17日取得)